

山村賢明 著 門脇厚司・北澤毅 編
『社会化の理論—教育社会学論集—』

世織書房 2008 年 A5 判 395 頁 ¥4620(税込)

秋葉昌樹

本書は、故山村賢明教授の代表的な論文 13 本を「第 I 部 社会化の理論」、「第 II 部 方法論」、「第 III 部 子ども論・家族論」に配列し収録した論集である。

第 I 部「社会化の理論」は 1970 年代から 1980 年にかけて執筆された 4 本の論文から構成されている。それぞれの論文は、当時教育社会学会で主要な研究課題であった“社会化”をめぐる原理的考察を行うものであるが、本書 1 章では、社会化概念を精緻化するなかで、教育という概念との関係について先行研究をふまえつつも独自の整理が提出されていた。すなわち、社会化と教育とはともに「社会的関係のなかで個人に加えられる（イン・ブット）人間形成的な作用として、大幅に重なりあう範疇であるが、しかし、社会化は本質的に体系維持的である」のに対して、「教育は“体系革新的”な役割を強く期待されているため両者は完全には重なり合えない」（p.13）とし、（学校）教育の果たすべき意義が論じられていることである。社会化と教育の違いを理論化する試みは、3 章でも行われていたが、それぞれの論文を読み合わせるとき、著者は社会化の理論的検討を進めつつ、その過程で教育という営みの可能性およびその社会的責務に関する理論をも意識的に精緻化していったように思われる。

第 II 部「方法論」に配されている 2 本の論文は、1980 年代に執筆されたものである。解釈的パラダイムによる教育社会学研究の意義と方法論的特質を論じた論文として、とりわけ私を含むエスノメソドロジー研究者にとってはバイブル的論文である。が、それ以上に、いま両論文を読むとき、

その議論の核心が、学問論、つまり学としての教育社会学のあり方に置かれていたことに気づかされる。今日の調査研究を取り巻く状況を“アカデミズム”に基づく調査研究と、行政や企業などの社会的要請による調査（“リサーチズム”ないしは“ポウリズム”における調査）とに分類し、前者が後者に吞み込まれつつある現状に警鐘を鳴らす。そのことは端的には本書 5 章「解釈的パラダイムと教育研究——エスノメソドロジーを中心として」（1982）において論じられ、6 章「教育社会学の研究——解釈的アプローチについての覚え書き」（1985）でも、社会的・教育的事象に対して解釈的パラダイムに基づきアプローチすること（＝解釈的アプローチ）の意義についてさらに議論を深めている。5 章でいわれるように「真理の追究というアカデミズムの使命を果たす」べく「学問的研究としての調査」のありように目を向け直し、「研究の新しい地平を切り開く」必要性（pp.126-127）は、社会調査士の資格認定制度が動き出した今日においてこそ、あるだろう。

第 III 部「子ども論・家族論」には、1960 年代から 1990 年代において執筆された論文 7 本が収められており、本書の中では分量的にも最も厚みがある。たとえば 10 章と 11 章においては、現代版「小さな大人」「小型の大人」がキーワードのひとつとされるなど、社会史研究に触発され議論を展開している。10 章「学校文化と子どもの地位分化——ガキ大将の行方をめぐって」（1982 年）は、ガキ大将と優等生によって展開された子ども世界のパワーポリティクスを著名な小説や教育実践記録から読み解きつつ、彼らの存在基盤たる学校文化の変容を現代社会の変容とともに論じ、また 11 章「現代日本の家族と教育——受験体制の社会学に向けて」（1989 年）は、10 章で子ども社会の変容の一因としてもあげられている受験体制について、これを「家族、学校及び職業集団を結ぶ三角形のなかで成立している事態」とし、子どもが総体的に、しかも否応なくそうした受験体制に組み入れられてしまうメカニズムを呈示している。これら 2 つの章に限らず、子ども論・家族

論といういわば各論として展開される第Ⅲ部においても、第Ⅰ部に収められた社会化の理論的検討、第Ⅱ部に収められた学問論にて示された問題意識、すなわち教育社会学の理論及び方法論の備えうるリアリティ感覚を厳しく問い直そうとする視座は見てとれる。そうした視座は、13章の節タイトルにもあるように、「実像の喪失」に対する危機感の表明でもあった。

* * *

立教大学・教育学科で山村先生から直接学ぶ機会に恵まれた私にとって、本書は、10数年前の立教での日々にタイムスリップしたような懐かしい気分にならせてくれた。学会のその時々の変遷を見つめつつ、その理論的課題をあぶりだし、ときに錯綜する議論の交通整理を行うことで、精神的に学会の転換手の役割を担い続けてきた山村先生。その知見は大学教育の現場で余すところなく呈示され、われわれ指導生は知的好奇心を喚起され続けた。1992年3月に教育学科を卒業した私は、1989年度および1991年度に、当時通年の必修科目として開講されていた「教育社会学」を受講した（2度目はもぐりの学生として）。いま手もとにある受講ノートによると、第Ⅰ部「社会化の理論」に相当する内容にほぼ半年、「受験体制の社

会学」を中心とする第Ⅲ部の前半に相当する内容にほぼ半年が充てられていた。ところが本書の第Ⅱ部に扱われているエスノメソドロジー（解釈的アプローチ）については、講義の中で直接的に扱われることはなく、3、4年生対象に開講されていたゼミの中で、指導生の個別の研究課題に即して教示されていた。先生は「教育調査法」の講義も受け持たれていたが、その受講ノートをあらためて見るならば、まさしくそれは調査法の形を借りた学問論であった。

所収論文の初出内訳は、日本教育社会学会の学会誌『教育社会学研究』より3本、同学会の論文集からは1本、日本社会学会の学会誌『社会学評論』より1本、自らが編者となった編著書より2本、他の研究者の編著書所収論文より3本、その他『青年心理』や『現代社会学』に収められた論文で2本となっているが、文献解題によると、収録論文を選定するにあたってもっとも重視されたのは、「現在、そしてこれからの教育社会学研究にとって、先行研究として意義」があると思われる点にあったという（pp.353-354）。本書は、そのことばどおりのものとなった。